

# 日本ピューリタニズム学会

## 2018 年度定例研究会

日時：2019 年 2 月 9 日（土）15：30

場所：京都大学産官学連携本部東京日本橋サテライトオフィス

（東京都中央区日本橋 2 - 3 - 1 日本橋ライフサイエンスビルディング 9 階、東京メトロ銀座線・半蔵門線「三越前」徒歩 3 分（駅直結）、JR 総武線「新日本橋」徒歩 2 分、JR 山手線・京浜東北線・中央快速線「神田」徒歩 11 分、JR 山手線・京浜東北線・中央快速線「東京」徒歩 17 分）

報告者：田島卓（国際基督教大学キリスト教と文化研究所助手）

「波多野精一時間論における聖霊理解」

### <報告要旨>

波多野精一は本邦における西洋哲学受容期に最良の働きをした哲学者の一人であるが、同時に、一番町教会（現在の富士見町教会）に出入りし、植村正久から洗礼を受けたプロテスタントでもあった。学者としての波多野の規矩からすれば、彼の信仰的な立場について述べた文章が少ないことは納得できるものではあるが、しかし、波多野宗教哲学の到達点というべき『時と永遠』における時間論においては、単に学問的自制を超えて、彼の宗教的経験が豊かに浸透しており、日本におけるキリスト教思想の一つの注目すべき成果を示しているようにも思われる。

本発表では、『時と永遠』において「永遠」を成立させる契機としての「神聖性」の位置を確認する。波多野の時間論は、存在の解明は時間においてなされなければならないという意味でフッサールやハイデガーの立場に近いが、同時に、時間化のためには他者が不可欠だとする立場において、レヴィナスやデリダとも共鳴する。そうした時間性の理解において他者との対面の場を特徴付けるものが「神聖性」だが、この神聖性には他者性、主体性の破壊、身体性といった契機が含まれる。これらの独特な神聖性理解は、私見では、しかし、使徒信条における聖霊論の解釈に位置付けられうるものである。本発表は第一にこの消息と妥当性を確認したい。

次いで本発表は、波多野時間論の意義と射程について探求する。波多野時間論の中核にある神聖性は「将来」（將に來たらむとす）と呼ぶ時間に接続されることによって、永遠という時の完成を考えようとする波多野時間論は、予期できない他者の到来を待ち受けることによって未来(a-venir)を考えるフランス現代思想と少なからぬ共通項を持ちながら、単に時間の有限性を語ろうとするデリダの後継者たちを超えていく視座を提供しているとさえ言えるかもしれない。のみならず、これは関根正雄が示したような旧約預言者の時間

理解とも深く関わりうるということを論じたい。